

大阪経済大学特別招聘教授・
経済評論家

岡田 晃

歴史に学ぶ

第三十五回 近代医学の父・北里柴三郎（医療ベンチャーフィーダー設立も）

ドイツ留学で破傷風菌を発見 ジフテリア血清療法でノーベル賞候補に

今年七月、新紙幣の発行が開始される。このうち千円札の顔となる北里柴三郎は、感染症の治療と予防に多大な功績を残し「日本の近代医学の父」と呼ばれている。

北里は一八五三年、肥後国阿蘇郡北里村（現・熊本県小国町）の庄屋の家に生まれた。地元で儒学や医学を学んだ後、一八七五（明治八）年に東京医学校（現・東大医学部）に入学した。だが持ち前の反骨精神から教師に反発するなどして留年し、卒業したのは八年後、三十一歳だった。

卒業後は内務省衛生局に入り、三年後の一八八六年にドイツに留学する。ドイツでは、結核菌やコレラ菌を発見した細菌学の第一人者、ロベルト・コッホに師事することになった。この出会いが北里の生涯を決定づける。

当初はコッホの数多くの弟子の一人にすぎな

かつた北里はやがて頭角を現し、ついに一八八九年、世界で初めて破傷風菌の純粹培養に成功した。当時、破傷風は有効な治療法がなく、致死率が非常に高く怖れられていたが、高名な細菌学者でも破傷風菌の純粹培養に失敗していた。北里はこれを乗り越え、世界的な偉業を成し遂げたのだ。

しかし彼はそれで満足しなかった。「人命を救うところまで進まなくてはならない」と考えた北里は、破傷風の治療法研究に着手。わずか一年後に、破傷風菌から抗体を発見、抗体を使った血清療法を確立した。

さらに同じ年、血清療法をジフテリアに応用する論文を発表する。同僚のエミール・フォン・ベーリングとの共同執筆で、この業績により、十一年後の第一回ノーベル生理学・医学賞の候補となり、北里は正規（まさのり）（後の東京帝国大学医学大学学長）が脚氣菌を発見したと発表したのに對し、北里は緒方の実験の不備を指摘して脚氣菌を否定した。現在では北里が正しかつたことが明らかだが、当時の内務省や東大など日本医学界の主流は脚氣菌説だったため、北里は疎まれたのだった。

北里は、英ケンブリッジ大学から新設の細菌学研究所の所長にと招きを受けたほか、欧米の名門大

学からも好条件で誘われたという。だが彼はそれらを辞退し、六年間の留学を終え日本に帰国する。「日本に恩返しする」との信念からだった。

内務省や東大から疎まれ不遇に 福沢諭吉が支援し研究所設立

北里のこうした窮状を見かねて支援に乗り出した人物がいる。現在の一円札の顔、福沢諭吉で

ある。福沢は私財を投じて東京・芝公園に「私立伝染病研究所」を設立、北里を所長に迎えた。

北里は水を得た魚のように研究に没頭するが、研究所が手狭になつたため、二年後に芝愛宕町に移転拡張した。

だがここでまたもや困難に直面する。周辺住民が「伝染病研究所なんて危険」と反対運動を起こしたのだ。そこで福沢は自分の息子を近所に住まわせて、住民を説得したという。

研究所移転から間もなくの一八九四年、百年近く姿を消していたペストが香港で爆発的に流行した。当時は原因不明で、手の施しようのない状態だったのだ。日本政府は北里を中心とする調査団を派遣、北里らは香港に到着するや、亡くなつた患者の解剖に着手した。感染リスクの大きい作業であるうえ、中国人の間では解剖は死者への冒涜



現テルモの設立発起人に、企業経営に通じる三つのポイント

一九一七年には慶應義塾大学の医学科（現・医学部）創設に尽力し、初代医学科長（後に医学部長）に就任した。同職は十一年間務めたが、すべて無給だった。すでに故人となつていた福沢への恩返しだつたのである。

一九一七年には慶應義塾大学の医学科（現・医学部）創設に尽力し、初代医学科長（後に医学部長）に就任した。同職は十一年間務めたが、すべて無給だった。すでに故人となつていた福沢への恩返しだつたのである。

さらに一九二一年には、体温器製造会社の設立発起人となつてゐる。当時の日本では体温計の多くをドイツなどからの輸入に頼っていたが、第一次世界大戦によつて供給が途絶してしまつた。そのため体温計の国産化計画が動き出し、北里らが

との考えが一般的だつたため、病院近くの小さな小屋にこつそり棺を運び込み、外から見られないよう閉め切つて行われた。

こんな悪条件の中だつたが、二日後にはペスト菌の発見に成功する。だが怖れていたように、調査団のメンバー一人がペストに感染してしまつた。幸い命はとりとめたものの、まさに命がけの大仕事だつたことがわかる。

それから五年後、日本にもペスト菌が上陸したが、北里は感染拡大防止に奔走、大規模流行となる前に収束させた。日本では一九二六（大正十五）年を最後に、現在までペストは発生していない。北里なくして、この結果はなかつただろう。

その後の一九一四年、伝染病研究所が文部省に移管されたのを機に、北里は同所長を辞任し、自費で北里研究所（現・学校法人北里研究所）を設立した。

第一は、困難に直面してもあきらめず挑戦していることだ。破傷風菌やペスト菌の発見、不遇の中でも研究を続けた点など、企業が苦境を乗り越えて強くなることの重要性を教えている。

第二は、社会のニーズにこたえること。北里の研究は「命」という差し迫つたニーズにこたえるものだつた。現テルモの設立も同じ。現在の企業もニーズをつかむことが成長のカギとなる。

第三は、多くの人の力を結集する人的ネットワークだ。北里は福沢のほか、新一万円札の顔となる渋沢栄一とも、結核予防や済生会病院設立などで協力した。また現千円札の野口英世、赤痢菌を発見した志賀潔など、数多くの医学者を育てた。企業経営においても社内外の人的ネットワークや他社との協業・連携が大きな力を發揮する。

以上の三点は、いずれも企業経営にとつて重要な要素だ。コロナ禍を経た今のタイミングで新紙幣の顔となる北里柴三郎に、改めて注目したい。

岡田 晃（おかだ あきら）

一九七一年、慶應義塾大学経済学部卒業後、日本経済新聞社入社。編集委員を経て、テレビ東京出向。「ワールドビジネスサテライト（WBS）」マーケットキヤスター、同プロデューサー、NY支局長、テレビ東京アメリカ社長、理事・解説委員長。一九〇六年から大阪経済大学客員教授。二〇一二年、同特別招聘教授。新刊『徳川幕府の経済政策——その光と影』（PHP新書）。

発起人となり「赤線検温器株式会社」を設立した。同社はその後、医療機器事業を拡大して発展を遂げ、今日のテルモとなつてゐる。コロナ禍ではこのような北里の偉業には、現代の経営にも通じる三つのポイントがある。

第一は、困難に直面してもあきらめず挑戦していることだ。破傷風菌やペスト菌の発見、不遇の中でも研究を続けた点など、企業が苦境を乗り越えて強くなることの重要性を教えている。